

THE MUSEUM OF ART, KOCHI

KENBI LETTER

ケンビレター

no. 119, 120

The special edition



高知県立美術館 開館30周年記念展

そして船は行く 30th Anniversary Exhibition: And the Ship Sails On

2023(令和5)年11月3日[金・祝]—12月3日[日] 会期中無休

美術館中庭(竣工時)

高知県立美術館
THE MUSEUM OF ART, KOCHI

The Museum of Art, Kochi

開館30周年記念号 特別企画

the 30th Anniversary

高知県立美術館のあゆみ

館長メッセージ

高知県立美術館は、1993(平成5)年11月3日、優れた作品の鑑賞の場として、また気軽に楽しく創作に親しめる美術館として開館しました。以来30年間、広く県民の美術に対する眼を養い創作意欲を高め、芸術文化における豊かな活動を引き出し、県民の文化意識の一層の向上に役立てることを目的に歩みを進め、高知県の芸術文化の拠点として期待に応える活動を目指し、職員一同邁進してまいりました。展覧会事業、ホール事業、教育普及事業、コレクションの収集・保存、調査研究など多岐にわたる事業をこれまで継続できたことについて、県民の皆様をはじめ、美術館の活動を支えてくださった関係各位に厚くお礼申し上げます。

一口に30年と言っても、そこには1日1日の活動の積み重ねがありました。それは次の30年も同じです。これからも当館のさらなる発展に向けて、活動のご支援をどうかよろしくお願い申し上げます。

2023年11月

高知県立美術館館長 藤田直義



撮影:Nae Fukata

想い出の企画

館長寄稿

BUENA VISTA SOCIAL CLUB

美術館ホールのチケットが完売したことは、今年の「リトル・デス・クラブ」を始めとしてそこそこあるが、2000年に開催した「ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ」コンサートは異色だった。何しろ前売券発売日の前夜、プレイガイドには徹夜でファンが並んでいた。電話予約は鳴りっぱなし、30分で売り切れた。というのも、当時はヴィム・ヴェンダース監督の「ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ」という音楽ドキュメンタリー映画が大ヒットし、ブームの真っ只中。本公演は全国6都市をめぐるツアーだったが、前売券の発売は当館を残すのみで、他会場は全て完売していたのだった。なぜこんな人気のコンサートを当館で開催できたかというと、展覧会の関連企画として、当時付き合いのあった企画制作会社と早々に開催の約束をしていたから。ちなみに展覧会 자체は中止となり、コンサートだけが残った。

本番当日は、ホテルのシェフが豪華ケータリングを準備。エントランス前には「北海道から来ました。チケット求む」という立札を持った人もおり、ただならぬ雰囲気であった。公演は当然盛り上がり、客席だけでなく舞台に上って踊り始める人が続出した。ブームはその時だけだったが、ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブの音楽の魅力は今でも不滅である。

文・藤田直義(当館館長)



公演ポスター

想い出の企画 展覧会編

「イタリア・謎と神話」展

文・奥野克仁(当館副館長兼学芸課長)

開館している限り展覧会はやり続けるわけで、それはよくマラソンに例えられる。この30年、よくぞこれほど多種多様な展覧会をやってきたものだと思う。筆者の専門は西洋の近代美術なので、それなりの数の海外展を担当してきた。展覧会の準備のために出張した国々はフランス、スイス、イタリア、ドイツ、英国、ベルギー、ロシア、そしてなぜか中国。の中でも、とりわけ印象に残っているのは、開館年度の1993年の真冬に旅したイタリアである。ミラノ、パルマ、ヴェローナ、ローマと、北部から中部の主要都市を巡り、現代作家のアトリエを訪ねた。その時に物した作家訪問記は「イタリア・謎と神話」(1994年)という展覧会の図録に掲載されているが、自分で書いたとは思えないほどの名文である。筆者の文才は開館と同時に頂点に達し、その後急激に衰退したようだ。ところで、南欧イタリアの冬は恐ろしく寒く、「何が南国だ」と思うほど寒い高知の冬との意外な共通点を見出した旅でもあった。



図録書影

イタリアにて作家のアトリエを訪ねた筆者(右から2番目)

想い出の企画 教育普及編

映像ワークショップ「M・Iプロジェクト」

文・長山美緒(当館主任学芸員)

「気軽に楽しく創作を楽しめる美術館」というフレーズが、当館の設置目的に掲げられています。開館当初から創作室が設けられ、銅版画とりトグラフの大型プレス機、バスタブ大の陶芸用の電気窯や電動ロクロなど、制作のためのハード面は整えられていました。その一方、教育普及担当の常勤スタッフは不在、学芸課内で試行錯誤のスタートでした。子どもから高齢の方まで、可能な限り間口は広く事業を行ってきましたが、当館の利用が少ない若年層が主体となった映像作家・大木裕之監督による映像ワークショップ「M・Iプロジェクト」(2000年)は、あらゆる意味で思い出深い事業です。大木監督の求心力で集まったマイペースな参加者とともに、終盤には県最西部の沖の島へ泊二日のロケハン合宿に繰り出しました。まさに「知らぬが仮」、未経験だからこそ実施できた合宿でした。その後、大木監督が参加者を中心によさこいチーム「M・I」を結成(現在も活動中)したり、参加者の中には制作に転じた人など、コトのはじまりに関われたことを嬉しく感じました。アートを介してヒト・モノ・コトの出会いの場を作ることも大切なことを感じた事業のひとつでした。



合宿最終日の記念撮影

想い出の企画 ホール事業編

ヘッダ・ガブラー

文・浜口真吾(当館企画事業課課長補佐)

2005年に行った本公演が、最も思い出深い事業です。公演は、一般財団法人 地域創造の舞台芸術活性化事業として、高知演劇ネットワーク演会の選抜メンバーがスタッフ、役者として参加し、演出は当時、静岡県舞台芸術センターに所属していた中島諒人氏が担当。美術館中庭と、演劇祭の聖地・富山県利賀芸術公園野外劇場で公演を行いました。役者として参加していた演会メンバーは、青少年センターで行われた最初の稽古から中島氏の熱い演出に圧倒され、この時から、出演者は演技に必要な体力と精神面を鍛えられました。そして1カ月に及ぶ美術館中庭での稽古。メンバーのほとんどは昼間に仕事があるため、夕方からしか稽古に参加できず、しかも昼間に熱のこもった中庭は、夜になっても蒸し風呂状態…。熱風の中、これまた熱い稽古が夜中までほぼ毎日続きました。本公演を無事終了出来たことは、演会メンバーにとって大きな自信となつたでしょうし、この公演の後、中島氏演出、演会メンバー参加の公演「誤解」を06年に静岡、高知、ソウルで、また翌年には高松で行うことになりました。地方からの演劇発信が叶ったのは当館としても大きなステップになりました。



公演ポスター

SECRET STORY コレクション収集秘話

開館前の1992年10月25日、高知新聞日曜版の1面トップに、高知県がシャガールの作品16点を31億円で購入することを検討している旨の記事が掲載された。当時、県の教育委員会に在籍して美術館の開設準備に携わっていた筆者の知らないところで、こんなとんでもない話が内密に進んでいたのだ(間抜けなことに筆者は新聞を購読していないかったので、このスクープを知ったのは次の日だ)。紆余曲折あってこの話は結局流れてしまうのだが、「美術館にシャガールを」という気運は県民の間で異様な盛り上がりを見せ、署名運動まで起こるに至った。県は美術品取得用の基金以外に特別の予算を組んでこれに応え、翌年の開館年度には、先の16点よりも遙かに良質な油彩画4点を購入したのである。

文・奥野克仁(当館副館長兼学芸課長)

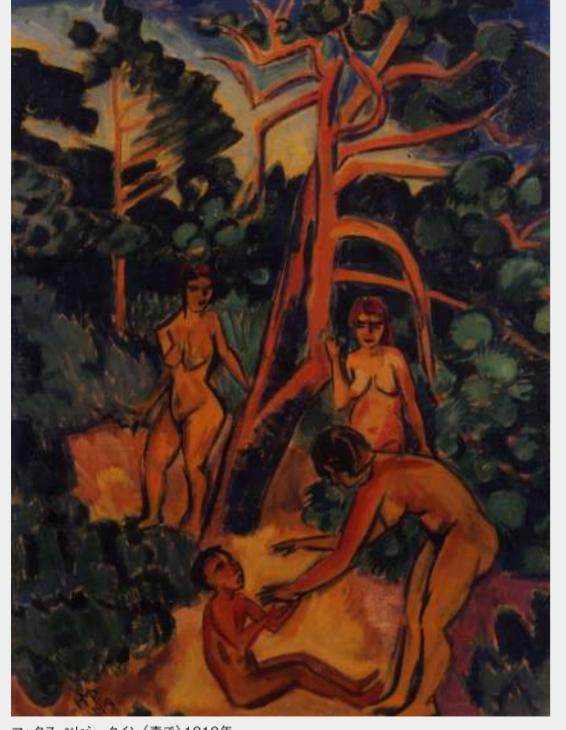
そして迎えた開館日。シャガール作品はお披露目となり、大変な賑わいであった▶



Exhibition Information - 01

高知県立美術館 開館30周年記念展

そして船は行く



第一展示室 マルク・シャガールと同時代の洋画

シャガールの油彩画は当館のコレクションの「顔」として、ずっとこの部屋の奥の壁に並んでいましたが、今回は場所を変え、あらたな視点でご覧いただきます（えっ、あまり変わらない？）。一緒に並ぶ洋画の中では、いわゆるドイツ表現主義の作品が目を引くことでしょう。「ヘタウマ」の元祖ともいわれる典型的な「ブリュッケ・スタイル」で描かれたマックス・ベヒュタインの《森》や、幻想的でありながら、どこか背徳的な主題を描いたハインリヒ・カンペンドンクの《少女と白鳥》は、ともに国内にある彼らの作品の中では最良のものひとつです。

文・奥野克仁（当館副館長・兼学芸課長）

30th Anniversary Exhibition: And the Ship Sails On

ニュー・ペインティングとは1980年代に流行した具象絵画運動で、新表現主義とも呼ばれました。その多くは大胆なタッチで大画面に描かれており、今回展示する作品も、大きいもので横幅4メートル以上になります。また平面だけではなく、彫刻と絵画のセットになっている、立体が画面に付いているなど3次元的な作品もあります。当館で一番の天井高を誇る第3展示室でも、これら大型作品でぎゅうぎゅうになるでしょう。また、ニュー・ペインティングの作家の中でも近年特に有名になったのは、ジャン=ミシェル・バスキアです。2019年には東京で大きな個展が行われ、当館所蔵の作品《フーアー》も展示されました。本作は、棒が突き出た変形カンヴァスに落書のような文字と絵が何層にも重なって描かれており、ドクロや王冠のモチーフも見られます。バスキアの他、アンセルム・キーファー、キース・ヘリング、ゲオルク・バセリツの作品も展示予定です。エネルギー感溢れる作品の数々をご覧ください。

文・柳澤宏美（当館学芸員）

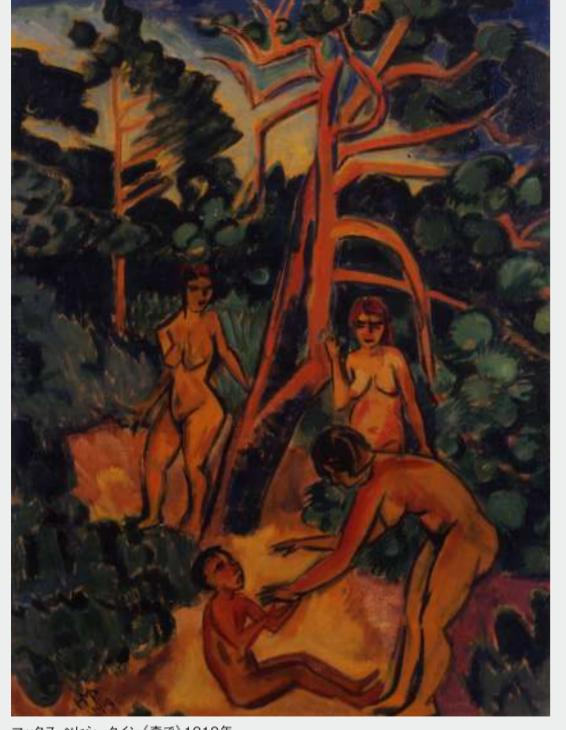


ニュー・ペインティングを中心

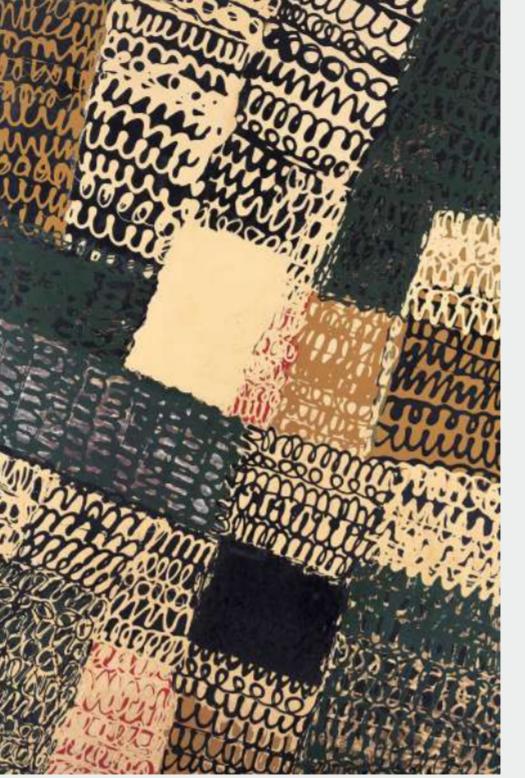
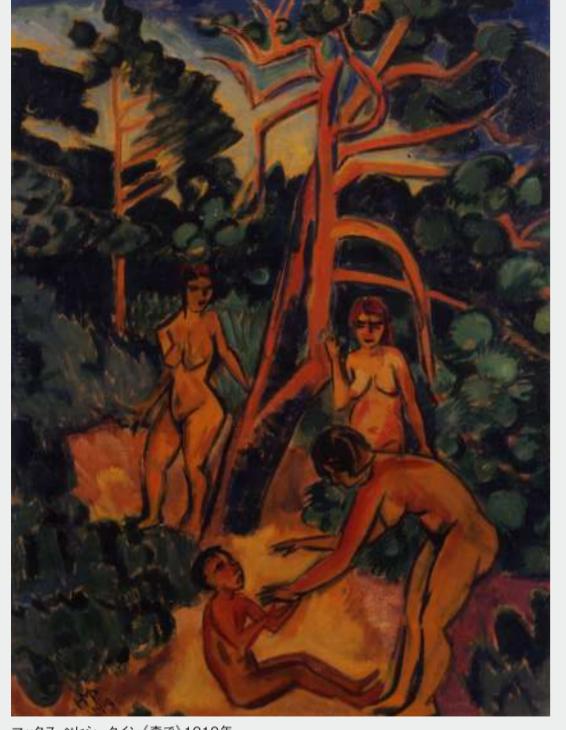


本展で一番「高知らしい」展示室とも言える本会場では、日本画、洋画、版画、彫刻、写真など、さまざまなジャンル、時代の作品が一堂に集結しています。「高知県ゆかりの作家の作品および補助資料」は、当館の収集方針の大半の一項目で、実は当館の前身である高知県立郷土文化会館時代から集めています。近年でも赤岡出身の写真家・福森白洋の写真作品や、個人コレクションからの一括寄贈を受けた「土佐もの」作品など、高知県ゆかりの新たな作品の収集を継続的に行っております。今回は、作品を通じて高知県の美術の愛容史も見えてくるような当館コレクションを幅広くご紹介します。中には島内松南《風神雷神図》のよう、10年以上ぶりに展示する作品も…！高知県立美術館のアイデンティティとも言える高知県の宝のものを、ぜひゆっくりとご覧いただけますと嬉しいです。

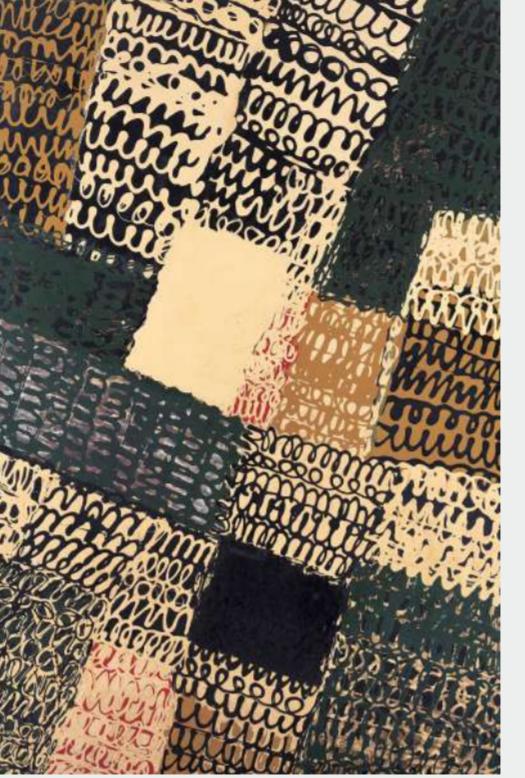
文・中谷有里（当館主任学芸員）



第一展示室 マルク・シャガールと同時代の洋画



第二展示室 日本の戦後美術



マックス・ベヒュタイン《森》(1919年)

30th Anniversary Exhibition: And the Ship Sails On

ニュー・ペインティングとは1980年代に流行した具象絵画運動で、新表現主義とも呼ばれました。その多くは大胆なタッチで大画面に描かれており、今回展示する作品も、大きいもので横幅4メートル以上になります。また平面だけではなく、彫刻と絵画のセットになっている、立体が画面に付いているなど3次元的な作品もあります。当館で一番の天井高を誇る第3展示室でも、これら大型作品でぎゅうぎゅうになるでしょう。また、ニュー・ペインティングの作家の中でも近年特に有名になったのは、ジャン=ミシェル・バスキアです。2019年には東京で大きな個展が行われ、当館所蔵の作品《フーアー》も展示されました。本作は、棒が突き出た変形カンヴァスに落書のような文字と絵が何層にも重なって描かれており、ドクロや王冠のモチーフも見られます。バスキアの他、アンセルム・キーファー、キース・ヘリング、ゲオルク・バセリツの作品も展示予定です。エネルギー感溢れる作品の数々をご覧ください。

文・柳澤宏美（当館学芸員）



ニュー・ペインティングを中心



本展で一番「高知らしい」展示室とも言える本会場では、日本画、洋画、版画、彫刻、写真など、さまざまなジャンル、時代の作品が一堂に集結しています。「高知県ゆかりの作家の作品および補助資料」は、当館の収集方針の大半の一項目で、実は当館の前身である高知県立郷土文化会館時代から集めています。近年でも赤岡出身の写真家・福森白洋の写真作品や、個人コレクションからの一括寄贈を受けた「土佐もの」作品など、高知県ゆかりの新たな作品の収集を継続的に行っております。今回は、作品を通じて高知県の美術の愛容史も見えてくるような当館コレクションを幅広くご紹介します。中には島内松南《風神雷神図》のよう、10年以上ぶりに展示する作品も…！高知県立美術館のアイデンティティとも言える高知県の宝のものを、ぜひゆっくりとご覧いただけますと嬉しいです。

文・中谷有里（当館主任学芸員）



10年(1期) 石元泰博展示室 フォトセンターの

シカゴ こども 1959-61年 ©高知県・石元泰博フォトセンター

本年は、2013年に開設された「石元泰博フォトセンター」の10周年にもあたります。今年度後半の石元泰博・コレクション展では、「フォトセンターの10年」と題し、歴代開催してきた展覧会を中心として、担当学芸員が取り組んできた幅広い活動の歩みを振り返ります。開館30周年記念展と会期を同じくする第1期では、2001年に当館で初めて開催した個展「石元泰博写真展 1946-2001」にまで遡る「フォトセンター前史」に焦点を当てます。学芸員による2005-07年高知新聞での連載エッセイにまとづき、選りすぐった代表作をご覧いただきます。文・朝倉芽生（当館学芸員）



日頃の芸術活動の発表の場として、県民の皆さんに貸し出しをしている県民ギャラリー。人によっては一番身近な展示室かもしれませんね。今回は展示室をふたつに区切り、異なる雰囲気の空間が出現します。見どころのひとつは、戸谷成雄の立体作品《森V》です。特別にしつらえた空間を占めるのは本作のみ。対となるドローリングとともに、作品との対話を楽しめます。統一感のある「美術館の歩み」として、当館のこれまでの活動を振り返る資料展示を行います。まずは壁のスペースが許す限り広がる、過去に開催された企画展のポスター群をご覧ください。こんな展覧会をしたねえと、ノスタルジーに浸るのも一興。その多様なデザインからは、当館がいかに幅広いジャンルの芸術を紹介し続けていたかを再認識いただけます。最後に紹介するのは、教育普及活動の一環として行ったプロジェクトです。大久保英治プロジェクト、『時の蘇生』柿の木プロジェクト in Kochiやスマープロジェクトなど、参加された方が多いはず。こんな企画しようが!?と発見に満ちた展示をご堪能ください。文・茂木恵美子（当館主任学芸員）



歩み 美術館の 石元泰博

県民ギャラリー

美術館製作映画上映

当館では、美術のみならず、舞台芸術や映画といった幅広いアートの紹介にも力を入れてきました。開館まもない90年代にはなんと、美術館による映画製作のプロジェクトも行われていました。30周年を記念して、そんな歴史もプレイバックします。文・朝倉芽生（当館学芸員）



美術館ホール 大木裕之監督作品上映

11月4日(土)美術館ホールでは、高知に拠点を持ち、開館当初から歩みをともにしてくださってきたアーティストの一人である、映画監督・現代美術家の大木裕之さんの上映会を行います。美術館製作の「HEAVEN-6-BOX」(1994-95年)は、ベルリン国際映画祭で高い評価を受けるなどした大木さんの代表作のひとつ。高知の風景や人々を写した断片的な映像がノイズミニージックとともに錯綜する本作は、高崎元尚さんによる美術館ローターでの「破壊」パフォーマンスや、橋本大二郎知事(当時)の出演シーンも見どころです。今回の上映会では、このほか高知ゆかりの作品や、めったに公開されないレアな作品、近作の凱旋上映など、盛りだくさんでお届けします。

シアタールーム 「ちんなねえ」 林海象監督・唐赤児主演



シアタールームでは、藤田館長（当時の役職はアートコーディネーター）がプロデューサーを務めた林海象監督「ちんなねえ」を特別上映。同作は、1996年の「金銀展」関連企画として能楽堂で開催された、大駒駄艦唐赤児舞踏公演「トナリは何をする人ぞ」のドキュメントと、赤岡町や美術館内で撮影されたドラマパートからなるアートフィルム。美術と舞台芸術、そして映画が融合した、まさに高知県美しい「ちんな（土佐弁で「おかしな」）」の意】一作です。

JR駅前にて、橋本知事(当時)と大木監督。「HEAVEN-6-BOX」1994-95年より
撮影:都築憲司

「ちんなねえ」1997年

高知県立美術館 開館30周年記念展

そして船は行く 30th Anniversary Exhibition: And the Ship Sails On

2023(令和5)年11月3日[金・祝]—12月3日[日] 9:00—17:00(入場は16:30まで) 会期中無休

観覧料 = 一般当日600円(480円)、大学生当日400円(320円)、高校生以下無料。※11月3日～5日は無料観覧日。
※()内は20名以上の団体料金。※年間観覧券持主は無料。※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、肢傷病者手帳とその介護者(1名)、高知県及び高知市長寿手帳持主は無料。

主催 = 高知県立美術館(公益財団法人高知県文化財団)、高知新聞社、RKC高知放送。後援 = 高知県教育委員会、高知市教育委員会、NHK高知放送局、KCB高知ケーブルテレビ、エフエム高知、高知シティFM放送

Exhibition Information - 02

ARTIST
FOCUS
#04

「甫木元空 窓外 1991-2021」

年齢やジャンルを問わず高知にゆかりのある作家を紹介する展覧会シリーズ「ARTIST FOCUS」。今回は四万十町と東京を拠点に、映画、音楽、小説など、幅広い領域で活動する表現者、甫木元空(ほきもと・そら、1992-)の個展を開催します。今回の展覧会タイトルに込めた意味や展示への思いについて、甫木元空さんに伺いました。リード文・構成 塚本麻莉(当館主任学芸員)

2023年12月16日[土]—2024年2月18日[日]

1階 第4展示室 9:00—17:00(入場は16:30まで) 12月27日～1月1日は休館

甫木元空 インタビュー

僕の母親は2年前の2021年に、父親は2013年に亡くなっています。「窓外」という言葉には「隔たり」のイメージがあります。もうこの世にいない、こちら(この世)からは隔てられた、「窓の外の人」になってしまった家族。その人たちと撞り合った、何気ない写真やホームビデオの映像をもとに展示空間を作れたらなと思い、「窓外」というタイトルにしました。映像や写真といった記録物を見返すことで、死んだ人が生きている人の中で再構築していくということに、以前から興味がありました。残された写真や映像で生きていた時の死者の像を見ることによって、今を生きている人たちが、像を頭の中に定めさせて。記録と記憶の関係性には、以前から自分の中で引っかかる部分があつて。特に現代は簡単に記録ができるし、どちらかというと記憶よりも記録の方にどんどん傾いています。記憶が軽んじられるこの時代にもう一度、生きていた—亡くなった人たちを写真や映像によって残してしまうこと、残り続けてしまうことに向き合ってみたいと考えました。今回展示するのはすごく個人的な写真や映像ですが、見た人が自分の家族や、亡くなった人たちをまた思い浮かべるといった普遍性があるといいなと思っています。



美術館ではどんな人が働いてるの?
職員やそのお仕事を不定期で紹介します。

美術館の なかのひと

第3回 総務課の皆さん



● 総務課の皆さんにインタビュー

Q. どんなお仕事をしていますか?
美術館の備品管理や経理業務はもちろんのこと、職員が普段から気持ちよく勤務する環境づくりを心掛けています。展覧会やホール事業によって駐車場が満車になった時は、駐車場整理もします!

Q. 仕事で印象的だった出来事は?

初めて券売機を導入した展覧会では、お金が詰まるなどエラーが起こるたびに事務室から走って行き、対応するという毎日でした。初めは対応に手間取り、お客様をお待たせすることがありましたが、その後スムーズにできるようになりました。貴重な体験でした。

美術館の
ここが
オススメ!

土佐漆喰の壁、土佐瓦の屋根などが印象的な建物は、水と緑に囲まれています。館内の美術鑑賞だけでなく、景色を見ながら館外を歩くのも立ち寄ります。

MUSEUM HALL REPORT

美術館ホール 報告

ピーピング・トム『マザー MOEDER』

●2023年2月18日(土) 19:00 高知県立美術館ホール

待望のピーピング・トムによる初高知公演は、家族三部作より『マザー』を上演。ピーピング・トムは、ベルギーを拠点とする世界的なダンスカンパニーで、2000年にアルゼンチン出身のガブリエラ・カリーソとフランス出身のフランク・シャルティエによって結成され、2009年の初来日公演以降、国内でも熱く支持されてきました。

このカンパニーの最大の特徴は「ダンスシアター」と呼ばれる、抽象的なダンスや動作と並行して断続的に立ち現れる、演劇的な演出方法。そして多世代の、多様なバックグラウンドを持つダンサー、俳優、オペラ歌手で構成されたメンバーに加えて、各上演地域より選出される「特別キャスト」の存在です。高知公演でも7名にご協力いただき満席の劇場で好演を果たしました。独特の世界観と予測不能なショールな展開、時に現れるユーモアに微笑み、圧倒されたお客様が多数いたなか、アンケートの感想で目に留まったのは「見たことのない、見たことのある世界だった」の一言。それもそのはず。舞台を行き交ったエピソードは、カンパニーメンバーの日常の個人的な記憶や、潜在的な意識から抽出された複数の母性／母親像であり、慈愛だけでなく、恐れや欲望などの激情も伴っていました。それが激しく心を揺さぶるアリティーとなって、皆さん的心に刺さったのでしょうか。

本企画では関連企画も充実し、家族三部作の舞台裏を追ったドキュメンタリー映画『サード・アクト』の上映や、過去作品の映像の紹介、そしてピーピング・トムの特徴的な要素を体験する3つのワークショップ（ダンス、演技と声、シニア対象）も開催しました。カンパニーメンバーのマリア・カラリナ・ヴィエイラさんが講師を務めたダンスワークショップでは、「ダンスシアター」を生みだすに重要な思考やロジックが共有され、表現する身体に一つずつタスクを積み重ねて踊ることを実践していました。地域のダンサーたちは普段と違ったアプローチに大きな刺激を受け、充実した様子でした。

文・松本千鶴（当館企画事業課主幹）



Peeping Tom "MOEDER" 高知公演でのワンシーン photo: Taisuke Tsurui 高知の特別キャストとガブリエラ・カリーソさん



photo: Taisuke Tsurui

およそ3年に及ぶコロナ禍で、中止を余儀なくされてきた海外からの招聘公演。ついに、2023年2月のピーピング・トム『マザー』と、同年6月バーニー・ディーター『リトル・デス・クラブ』にて、再始動しました！これもひとえに再調整に奔走くださった国内外の関係者の皆様のおかげです。心より御礼申し上げます！

バーニー・ディーター『リトル・デス・クラブ』

●2023年6月24日(土) 19:00、25日(日) 15:00／19:00 高知県立美術館ホール

ちょっぴり不謹慎で挑発的な歌詞とMCで観客を魅了した東ベルリン・キャバレー界の女王バーニー・ディーターが贈る、見世物小屋を彷彿とさせる現代的なキャバレー『リトル・デス・クラブ』。国内でも珍しいジャンルの舞台、かつ高知単独公演の無謀な企画で当初は頭を抱えましたが、なんと本番1週間に全公演とも前売券が完売！強烈なインパクトを放った広報物や、バーニーさんへの取材記事が掲載されたフリー紙「intoxicate」を見て、遠くは新潟や群馬、福岡からも当日券を求めて来高した方もいて職員を驚かせました。

本公演では、技術的な山場もあり、この舞台のインスピレーションとなったワイマール時代の退廃的な空気感を演出するために劇場も特別仕様に仕立て、地元内外の舞台技術チームや人間を宙吊りにする専門家とも知恵を絞って、数々のダイナミックな大道芸やバーニーさんお気に入りのバンドメンバーとのパンクジャズの生演奏を実現しました。私自身も初めて目撃した刀剣呑みや、圧倒的な身体美で魅せる空中ブランコでの軟体芸、ハンドバランス、ポールダンス、フラフープ、そしてヘアーハンギングの役者は超一流ばかり。鮮烈なアクトが際立つ一方で、非常に今日的なメッセージも秘められていて、その思いが客席に届くたび拍手が沸き起こりました。アンコール曲の前に、すでに劇場全体でスタンディングオーバーション！「こんな熱気を劇場に生み出せる高知が最高！」とバーニーも日本でのいつかの再演を熱望していました。

文・松本千鶴（当館企画事業課主幹）

●『リトル・デス・クラブ』を鑑賞したお客様の感想

かぶりつき席で鑑賞。薄暗い特設の舞台は、観客席と隔てるものはなにもない。生バンドをバックに観客を煽り、せつなげに歌うバーニーや妖艶で迫力ある演目は、まさに大人のための圧巻のショータイムだった。

キャバレー文化に馴染みのない世代には初めての世界観でした。日頃押し込められている欲望がさらけ出された生身の表現が、非常日で露わになる。そのことがおぞましくもあり、とてもリアルでした。唯一無二のパフォーマンスの背後に感じる生き様や、性のしがらみからの解放に、胸のすく思いがしました。

これほどハラハラ、ドキドキした公演はなかった。まさに奇想天外、予測不能。最後まで「何?!何?!」のオンパレード。これが日本初、しかも高知だけ。勿体無いと思いつつ高知県民としてはなんだか誇らしい。主催者に心から拍手！



千秋楽での集合写真 Bernie Dieter's Little Death Club

photo: Taisuke Tsurui